

上代貴族の學問について（下）

——宋學受容の内部的契機の問題——

和 島 芳 男

目 次

序

一、學者の生涯

二、學道の衰微（以上前号）

三、經學の復興（以下本号）

四、宋學の端緒

三

令条所載學生四百人者、是明經之生徒也、

かの長徳元年八月の太政官符のこの一節は實は大外記兼博士中原致時らの奏狀中の語であり、さすがに令の學制の本旨を捉えたものであった。「夫學校者賢才之所聚、王化之所宗也、理國理家、皆賴三聖教、尽忠尽孝、率由茲道」という精神にもとづく大學寮の教育は当然經學を中心とする儒教主義を以て貫かれた。學令によれば經業は周易・尚書・毛詩・周礼・儀礼・礼記・春秋左氏伝を各一經とし、學生をして二經・三經または五經に通ぜしめ、ほか

に孝經・論語を全學生に兼習させた。そして周易には鄭玄・王弼、尚書には孔安國・鄭玄、毛詩・三礼には鄭玄、左伝には服虔・杜預、孝經は孔安國・鄭玄、論語は鄭玄、何晏の注を用いるのを正業とした。これを唐制に比較すれば、經においては春秋公羊伝・同穀梁伝を欠くのみであるが、注においては五經正義以前、漢末魏普の鄭王二學を併用し、ことに鄭玄の古風を重んじたことが注目される。また學生にして三經以上に通じ禄仕を求める者があるときは大學寮における試験、すなわち寮試の上、太政官に挙送し、式部省における國家試験、すなわち省試を奉ぜしめた。考課令によれば省試には四科目あり、秀才は博學高才の者を取り、方略策二條を試み、文理ともに通ずる者を及第とし、明經は二經以上に通ずる者を取り、その二經のおのおのについてそれぞれ三四か條と、孝經・論語の兩者を通じて三か條と、合せて十乃至十二か條の經文および注をあげて問ひ、その六か條以上の義理を弁明する者を及第と認めた。また進士は時務に關ひ、かつ文選・爾雅を読んだ者を取って時務策二條を試み、その義理の當る者にして文選・爾雅を暗誦する者を及第とし、明法は律令十か條につき義理を問ひ、八以上に通ずる者を及第させた。これらの及第者については選叙令の規定にもとづき、學生各自の受験科目と成績とにより大初位下以上正八位上までに叙し、それぞれ相當の官職に補任した。なお五位以上の子、三位以上の子および孫の出身の場合にはすでに叙せられた蔭位にさらに一階を加える定めであつた。

このように大學寮は經學を中心とする儒教主義教育により古代國家に有用なる官吏を養成するところであるから、朝廷はしきりに學者・學生を優遇し、大學寮教育の振興をはかつたのであるが、博士たちの講義の内容や寮試の問題、學生の學習効果の細目などについては遺憾ながら史料が欠乏して多くこれを知ることができない。ただ學令の規定によれば、學生は入学後まず音博士に就いて諸經を漢音で讀むことを習ひ、然る後に博士・助教からその講義を聴いたのであるが、この漢音の學習がすでに相當の負担であつた上に、諸經の義理を弁明することは學生たちにとってさらに容易ならぬ業であつたに違ひない。しかしわが學令が採択した漢末魏普の學風は大体において文學を主とし、義

理よりも訓詁を先とするものであったし、学令それ自体の中にも「学生雖^ニ講説不^レ長^一、而閑^ニ於文藻^一、才堪^ニ秀才進士^一者、亦聴^ニ挙送^一」^(七)という規定があり、ことに秀才出身者はその官途においても明経出身者に優先するのであったから、学生たちの関心が一般に義理よりも文章に向ったのは極めて自然であった。それに神龜五年十月に文章博士、天平二年三月に文章生二十人が置かれた上に得業生についても明経得業生四人のほかに文章得業生二人を選ぶことに定められたのは、大学寮本来の明経科に対する文章科の分化、独立の傾向を馴致するものであった。さらにこのころ入唐十九年に及んだ後の右大臣吉備真備が三史五経その他の諸道を学んで天平七年四月帰朝、孝謙天皇に礼記・漢書を進講、学生にも五経とともに三史をも伝習せしめたが、この史学の導入はまた文章科に生彩を添えた。また宝龜年間三度大学頭となった淡海三船が文章博士を兼任したことも文章科の地位を重からしめた。かくて大同三年二月の紀伝博士設置、弘仁十二年二月の文章博士相当位ひき上げ、承和元年四月の文章博士増員を経て延喜式に至り、学生から擬文章生・文章生・文章得業生と昇進する道が開け、三史も文選とともに各一経と数えられるに及んで、今や経学専攻の学科となった明経科、いわゆる明経道に対し、史文を併せ学ぶ文章科、すなわち紀伝道が独立し優越する形勢はすでに歴然たるものとなった。¹¹

このような明経・紀伝兩道の盛衰はまた明経家・紀伝家の榮枯にも反映した。むかし宝龜年間、伊与部家守は遣唐使に随^テ入唐、五経大義と切韻文字体とを習い、帰朝後直講・助教としてはじめて春秋三伝の義を講じ、のち延暦十七年三月に至り、家守の請に依り公羊・穀梁二伝を各一経とし、長く講授することになった。¹²この家守の子、善道真貞は得業生から立身して助教・博士となり、三伝三礼を業とし、ことに当代公羊を読む者は真貞のみと称せられ、天長八年八月、神泉苑行幸の際にも三伝論議の座主に推され、晩年には「明経の碩儒」として特に摂津国の荒田九段を賜わった。¹³また滋善宗人は博士御船氏主に三礼を学んで「後代之礼聖」と推称され、直講・助教として嵯峨天皇朝に仕えたが、常に儒素を以てみずから守り、未だかつて宮中に入り公卿大夫にまみえたことはなかったという。¹⁴なお当代

の明経家として比較的に世に顯われたのは善淵愛成である。愛成は助教善淵永貞の弟、清和・陽成二朝に仕え、文徳実録の撰修にあずかり、助教に任ぜられ、日本紀講筵の博士となり、その後宇多天皇に周易を進講して大学博士に昇った。晩年病を得たとき、天皇は特に藏人を遣わしてこれを勞問せしめられた。¹⁵しかしこの後は延喜十六年七月、博士八多貞紀が穀梁伝を講じたぐらいで、その他に明経家の事蹟の著しいものは見えない。¹⁶

これに対し紀伝家の側にはまず菅原清公がいる。延暦年中遣唐使に随って入唐、帰朝後大学頭となり、凌雲新集・文華秀麗集の撰修にあずかり、文章博士を兼ね、式部大輔その他を歴任、その後一たん播磨権守に転出したが、「国之元老、不_レ合_二遠離_一」とて召し返されて文章博士に復し、晩年ついに從三位に叙せられた。清公の子は善も文章博士・大学頭・式部大輔などに任じ、貞観格式の撰修に従事し、やがて参議從三位に昇り、門下に多くの人材を養った。¹⁷道真はかの清公の孫、この是善の子である。これよりさき春澄善繩は文章得業生から大内記に進み、ついで文章博士に任ぜられて後漢書を講じ、仁明・文徳兩朝に仕えて後漢書および莊子・漢書・晋書を進講、清和天皇朝には参議・式部大輔となって続日本後紀の撰修に当り、その病歿に際して從三位を授けられた。善繩は生来つつしみ深く、諸博士がたがいに門戸を立てて弟子たちの分争を来たす世にあって、ひとり門徒を謝遣し、謙退してみずから守ったという。¹⁸この善繩とはほぼ同時代の人、大江音人は菅原清公に師事して後漢書を読み、仕官後は群籍一覽・貞観格式の撰修にあずかり、累進して参議從三位左衛門督兼檢非違使別当に至ったが、かれもまたすこぶを謙遜にして未だかつて驕矜の色を現わさなかったという。¹⁹右の善繩・音人が史学者として地味な生活を守ったのに対して、華やかな文名を後世にとどめたのは都良香である。良香は文章博士都腹赤の甥で、はじめの名を言道^{ときみち}といい、早く文才を示して文章得業生となり、少内記に進み、ついで掌渤海客使を命ぜられたとき、「姓名相_二配其義_一乃美、若非_二佳令_一、何示_二遠人_一」とて良香と改名し、やがて大内記・文章博士に任ぜられた。かれはひろく史伝にも通じ、貞観十八年四月大極殿火災後^{（八七〇）}の廢朝の問題、また翌年四月夜間日食のときの廢務の要否につき諸博士の意見が徴せられたとき、良香は春秋穀梁伝を

引いて廢朝・廢務の必要を論じ、ことごとく採用されたが、まもなく壯齡にして世を去った。²⁰その後延長四年五月、入唐求法僧寬建が本邦の文士の文筆を請うたとき、朝廷は菅原道真・紀長谷雄・橘広相らの詩とともに良香の詩一卷を寬建に附して唐家に流布せしめた。²¹江談抄によれば良香に「氣霽風櫛ニ新柳髮」、氷消浪洗ニ旧苔鬚」なる佳句があり、月夜に騎馬の人々がこの句を誦しながら羅城門を過ぎたところ、楼上から「阿波礼阿波礼」と賛歎する声が聞えたといい、またかつて良香が竹生島に参詣し、「三千世界眼前尽」と詠じたとき、弁才天が託宣を以て「十二因縁心裏空」と附けたとある。²²しかしこのような内容空疎な形式的対句が靈驗談と結びついてまで喧伝されたところに、われわれは改めて紀伝道の存在理由を見いだすべきであろう。

良香の後、宇多・醍醐朝には紀長谷雄・三善清行の両雄が相ついで文章博士・大学頭となり、朱雀・村上朝には大江朝綱・同維時の従兄弟がともに文章博士として相ならび、維時はまた大学頭を兼ね、式部大輔菅原文時と文名をひとうした。これらの紀伝家がそれぞれの史文の才を以て朝政を修飾し、ことに形式美を重んずる貴族社会の好尚に投合し、この間またたがいに官位の昇進をきこいつみずから貴族化の道を急いだ実際についてはすでに第二節に詳述した通りである。かの大江匡房がその著、続本朝往生伝において「時之得人也、於斯為盛」と特筆した一条天皇朝についても、文士としては大江匡衡・同以言・紀齊名・菅原宣義・高階積善・藤原為憲・同為時・孝道・相如・源道濟の十人をあげるが、明経にはわずかに清原善澄・同広澄の兩名を載せるに過ぎない。また官途についてみても、紀伝家には右大臣菅原道真をはじめとし、中納言に紀長谷雄・大江維時、参議に春澄善繼・菅原是善・大江音人・橘広相・三善清行・大江朝綱らが名をつらね、ほかに菅原清公・同文時が従三位に叙せられているが、明経家にして公卿の列に加わったものは皆無というべく、大学博士善淵愛成にしてもついに五位にとどまったようである。紀伝・明経二道の間にかくもいちじるしい落差が認められることが明経学生の士気を沮喪せしめ、ひいてはこれらの素質の低下を来たしたことは想像にかたくなであろう。かの「令条所載学生四百人者、是明経之生徒也」という長徳元年七月

の中原政時の奏状はかかる客觀的情勢の裡にあってなお明経道こそ大学寮本来の学科たるべきことを追懷し、明経問者生の課試の方法を確定し、明経学生の出身のために血路を開かんとするものであったが、所期の成果を得がたかつた。²⁴そしてあたかもこの長徳のころ文章博士であった大江匡衡の時代からかれの曾孫大江匡房の時代に至るまで約百二十年間、紀伝道が依然その隆盛を維持したことも第一節に述べた通りであるが、明経道の沈滞はこの間にもいよいよ著しかった。秋奠の日、明経の博士が経書を講じ、翌日また学生らとともに紫宸殿における内論義に召されることは仁明天皇朝以来流例となり、これこそ明経家の晴れの場であったが、かの長徳元年^(九九五)中原政時の奏状にさえ「何況春秋秋奠、明獻惟嚴、移^二唐家之儀^一、整^二廟堂之礼^一、明経道之最也、而奠祭之場、樽節之士已稀、審問之席、析疑之徒猶乏、將聖之道、恐殆^二荒墮^一」²⁵という通り、秋奠も論義もすでに久しく伝統的形式に墮していたのであり、ことに内論義は後朱雀天皇朝以後ついに廢絶し、また講書にしても大体毛詩・尚書・周易・左伝・礼記・孝經・論語に限られ、しかも後にはこれらの七経を毎年一経ずつ講ずるその順序も固定したのであるから、恐らくその際講ぜられる章句も大体一定の範圍から選択されることになったであらう。従って講説の内容も必ずしも深さを求めず新奇を追わず、ただ伝統的解釈を復誦し、講書後の賦詩の料として役立つ程度で満足していたと思われるのである。²⁶

明経道がかくも萎微沈滞を極めたとき、敢然これが復興を企てたのは「日本第一大学生」²⁷藤原頼長である。かの大鏡のはじめに十人の子を持ち、しかもその末子が「いとど五月にさへむまれてむづかしきなり」と歎いた女のことが見えるが、頼長も保安元年^(一一二〇)五月にうまれた。兄忠通と姉泰子（鳥羽上皇皇后、高陽院）とが右大臣源頼房の女を母としたのに対して頼長の母は土佐守盛実の女であった。この母の門地のいちじるしい相違のために少年時代から特別の奮発をうながされたことは、そもそも頼長の性格を決定する第一の要素であった。頼長が十七歳にして早くも権大納言正二位右近衛大将であった保延二年^(一一三〇)の十月、父関白忠実が病のため灸治をおこなうと聞き、自身の物忌にもかかわらず父のもとを見舞った。忠実は驚いて物忌に来るとは如何ととがめたところ、頼長は「雖^二物忌^一、為^レ父破、居^レ家

去^レ忌ニハマサリナム」と答えた。これに對し忠実は「此事有^ニ其理^一、雖^レ然小彊」といったが、内心は大いに満足であつたに違ひない。⁸⁰ ついで十一月、頼長が豊明節会の内弁をつとめる間、忠実が終始祈念を続けたのは孝行息子にむくいる特別の愛情の一端であつたろう。翌月頼長は内大臣に任ぜられたが、その後康治元年^(一一四二)、母の病のために泰山府君を祭つたときには「家貧、乏^ニ米穀^一之故」にわずかに自分の装束一具を以て料物とした。また翌二年には乳母^(一一四三)備後の恩に報ずるためその姪但馬を扶持しようとしたが、「今居^ニ三台之任^一、無^ニ一戸之封^一」^(一一四四) きため、毎年米五十石を与えることにした。経済の不如意は兄関白忠通と違つて庶子の身の悲しさであらう。こういう事情もまた頼長の性格に作用し、一切のものの価値が形式や伝統で決定される現状に對して懷疑と不満を抱き、その形式や伝統が固定する以前の過去をよき時代として追想し憧憬し、従つて過去において価値を認められたにもかかわらず、現在はその価値が没却されているものに対し、積極的な同情と関心とを寄せるに至つたのであらう。頼長が當時流行の詩文を顧みず、もっぱら經史の勉強に邁進したのも、かれのこういう復古主義的傾向の現われであつたと思われる。いまひとつ頼長の勉強を促した事情をあげるならば、それは當時の朝臣たちの無学であらう。紀伝道の隆盛以来、學者たちがたがいに官位の昇進を競い、表文・願文の代作などを機會として権門勢家の特別な恩顧にあずかろうとしたのであるが、こうして本来は大学寮の教官としてもっぱら學生に教授すべき學者たちが、その文筆を以てたやすく朝臣たちの私的需要に応じたことは、自然文筆の道を専門的職業化し、一般朝臣の積極的向學心を減退せしめるものであつた。もとより頼長の父忠実が公事に造詣深く、また兄忠通が能筆にして詩文に長じたように、第一流の貴顕の間にはさすがに教養の見るべきものがあつたが、一般の朝臣にとっては學問はもはや実質をとまわらない虚飾に過ぎず、ある者は驚くべき無智を暴露したこと、すでに第二節に詳説した通りである。従つてこういう公卿たちがものを自主的に合理的に判斷する自信も能力も無く、ひたすら因襲になずみ伝統にたよるばかりはなかつたこと、むしろ當然であつたのである。しかし復古主義的改革意欲に駆られた頼長はこの當然を當然として見過ごすことはできなかったであらう。

う。永治二年四月、近衛天皇即位による改元の議があり、文章博士藤原顯業・同藤原永範らをして勘申せしめた上、宋書の「以三康治二道」に拠り康治と改元した。このとき頼長は康治の反は飢であり、かつ康も治も水に従う字であるから水災によって飢饉を来たすべきことを憂えたが、改元定に参入した権大納言藤原実能以下諸公卿が誰もこの事を申さなかったと聞き、「今卿士皆以不_レ学_二経史_一」、国家滅亡、豈_レ不_レ宜哉」と歎じたのであった。

頼長の学問についての記録は、あたかもこの康治元年の正月に左伝を見、ついで三月孝経を読み、公羊伝を抄出したことから始まっている。公羊伝はかの唯一の公羊学者といわれた善道真貞の後、ひき続き伝習された明証も無く、釈奠の講書にも久しく用いられなかったのであるが、頼長は四月に入つてはじめて公羊解微を見、この書を見ずして春秋の大義に通ずることができないと知った。また前記の康治改元議についての論評には穀梁伝を引いており、頼長が春秋三伝の理解につとめたことはその日記にも「凡雖_二雅拙_一、於_二春秋_一随_二力及_二所_一学也」と書いている通りである。ついで頼長は毛詩・尚書の正義および論語皇侃疏などを学んだが、かれは内裏に出入する車中において太平御覽の諠誦を試み、また春日詣の途上において毛詩十二巻を読了するほどに旺盛な読書力の持主であつたからその進境もいちじるしく、康治二年七月、春秋左氏正義三十六巻を見おわたのに続いて礼記を読みはじめ、九月に早くも全二十巻を読破し、そのうち檀弓上下・学記・中庸を「殊勝之巻」と認め、これらを重ねて見ることにした。この年十月、頼長がそれまでに学んだ諸書をまとめて作つた目録によれば尚書・毛詩・三礼・春秋三伝・孝経・論語などの経家が三百六十二巻、史記・漢書・後漢書・三国志などの史家は三百二十六巻、蒙求・臣軌・帝範・文選・貞觀政要などの雑家は三百四十二巻、合計一千三十巻に上つてゐる。中にも経家において、頼長が正義や皇侃疏を習つたことは前にも述べたところであり、かれはなおこの年のうちに礼記正義二十巻も読了したが、さらに目録によれば老子二巻・莊子三十三巻のほか經典釈文七巻をも学んでいる。すなわち頼長はわが学令所定の「教授正業」よりも新しい唐代正義の学心に心を寄せて老莊にまで及ぶとともにまた当時のかの地の経学の精粹にも触れようとしていたのである。

このような頼長の勉学の師となつたのは藤原成佐である。成佐は藤原友業・同通憲とともに「当世之才士、只此三人耳」と頼長が認めたその一人であり、康治二年七月、頼長が自第の文宣王影前において左伝の講論を催し、成佐に講師をつとめさせたときにも、「其辞義絶妙、不可得言」、衆人側々歎美したほどであった。この年十月、頼長は明年甲子革命の議にあずかることを望んだが、「革命、其事出レ自レ易、不レ学レ易難議ニ其事」という成佐の教に従つてまず易を学ぶことにした。しかし当時易を学べば凶ありとか、五十以後に学べしとかいう俗伝があり、頼長もしばらく躊躇したが、「此事更無三所見、如論語皇侃疏者、少年可レ学之由所見」でもあるので、ついに十二月七日、陰陽師安倍泰親を招いて泰山府君を祭り、成佐の草した都状を捧げ、翌日周易第一巻を案上に奉じ、再拝のちはじめてこれを見た。そして成佐を相手として年内に周易十巻を通読、さらに周易正義を見、翌三年正月には成佐とともに易点の改正を進め、二月に入つては昌泰以来の革命革命の勘文をしらべ、また春秋緯・孝経鈞命決などの緯書まで渉獵した。そしてこの月十七日、甲子定があり、ついで二十三日、文章博士藤原茂明の撰進にしたがい、後漢書の「応天養人」に拠つて天養と改元されたのであるが、その際頼長がその周到な用意にもとづいていかなる卓見を呈したか、詳らかに知ることができないのは遺憾である。この年の秋、頼長は礼記正義の勉強に主力をそそぎ、十二月に至つてその功を終つたので、この月二十四日、助教清原定安を大学寮に遣わし、今や五経正義百数十巻を悉く見たり、学業成就せる由を廟前に告げて拜謝せしめた。翌二年正月、頼長はそのおびたしい蔵書を収めるため文倉を造つた。それは東西二丈三尺、南北一丈二尺、高さ一丈一尺、四方の板張りや南北の戸には石灰・蠣殻を塗り、周囲に芝垣を築き、乾の角の通路から水を引いて芝垣の外に溝を掘り、その外に竹をうえまわし、さらに外側に築垣をめぐらしたという、防火の手段を尽した構造で、四月に落成、頼長は成佐とともに威儀を正してこの倉に入り、はじめ東西の棚に書物を置いた。成佐はさきに蔵人に補せられ、式部丞を兼ねたが、「成佐補蔵人之後、禁中有古風」³²という評判もあつて一層頼長の信任を得、つねにその講筵に侍した。のち久安四年正月、成佐が式部権少輔に

任ぜられんことを請うたとき、頼長は「近代無_レ以_ニ才能_一任_中弁官_上、又如_レ此儒官不_レ超_ニ上_一薦_ニ者、誰人励_レ学乎、加_レ之、微臣記_ニ名姓_一、唯成佐之力也、臣大臣勞十三年、以_ニ臣勤王之功_一、枉賞_ニ成佐_一」せられんことを奏し、さらに大外記中原師安を大学寮に遣わし、成佐の任官の成就を先聖に祈らしめ、ついに法皇の裁可を得た。同六年十二月、成佐は病によって出家せんことを請うた。頼長はこれを諭止し、再三薯蕷粥を煮て贈ったが、成佐は年末に出家を遂げ、翌七年正月、四十五歳で卒去した。頼長はかねて成佐の宅を見舞い、またその卒去後仮に服しようとしたが、いずれも父忠実の制止により果たさなかった。³³

右の藤原成佐が頼長にとってつねに篤実な師父であったのに対して、わずか数年の交遊ながらこの青年貴族に深い感銘を与え、その客氣をさらに激発したのは藤原通憲である。頼長はかねて博学の聞こえ高い通憲を「当世之才士」と認めていたが、康治二年八月、その才士がいよいよ遁世すると聞いて使をやり、「以_ニ其才不_レ居_ニ顯官_一、已以遁世、才余_レ世、世不_レ尊_レ之、是天之亡_ニ我國_一也」と伝えしめた。数日後の夜、頼長は通憲と逢い、ともに学道頽廢の世を慨歎した。台記この月十一日条にいう。

入_レ夜逢_ニ通憲_一、相共哭、令_ニ通憲吹_ニ笙_一、欲_レ歸命_レ余云、臣以_ニ運之拙不_レ帶_ニ一職_一已以遁世、人定以爲_ニ以_ニ才之高_ニ天亡_レ之_一、弥廢_レ学、願殿下莫_レ廢、余白、唯、敢不_レ忘_レ命、涙下数行、

「人定以爲_ニ以_ニ才之高_ニ天亡_レ之_一、弥廢_レ学」とは驚くべき自信満々のことばであるが、こういう自信家と相ともに哭し、学道の保持者たらんことを囑せられて「敢不_レ忘_レ命」と落涙した頼長自身もすでに相当の自信家であった。かれが成佐の教に従い、甲子改元定の議にあずかるために周易を研究した康治三年の二月、通憲に請うて易筮成卦の法を習い、五月早くも通憲の疾を筮してその癒ゆべきを推し、七月には通憲と終夜筮を談じたが、翌天養二年六月にはすでに出家した通憲とト・筮の先後を論じ、トを先とする通憲の誤まりを指摘してついにかれを承服せしめた。このとき通憲は改めて頼長の学識を称揚し、

閣下才不_レ耻_二千古_一、訪_二于漢朝_一、又少_二比類_一、既超_二我朝中古先達_一、其才過_二于我國_一、深所_二危懼_一也、自_レ今後、莫_レ學_二經典_一矣、

と、ほとんど追従に近い褒詞を呈した。頼長はこれを日記に書き、「余不_レ対、心為_レ榮」と結んでいる。そしてこの数日後、通憲から近日災惑の右執法星を犯す天変あり、これ大臣の慎しむたるべしと知らせて来たとき、頼長は「天変頻見、怪異重示、以_二不_レ肖_二大位_一之所_レ致也」とて辞表をたてまつろうとしたが、「依_二天変_一上表之例、近代不_レ聞」という父忠実のことばに従って思いとどまった。これも頼長のみずから任ずること、いかにあつかったかを示すものであらう。

しかしこういう自信があればこそ、頼長の学道振興策も積極的に遂行された。かれは天養元年八月、^(一四四) 釈奠の上卿を奉仕し、翌二年二月の釈奠にも大学寮におもむいた。「行事、講論、不_レ異_二承平天慶比_一、見者嗟歎」と自讃するところを見ると、かれが釈奠の儀容の復興のために種々の施設をおこなったことが推察される。先年学業成就を廟前に拝謝せしめたこともまた大学寮の学問的權威を重からしめるものであった。また同じく康治二年^(一四三)の七月、頼長がその自第に孔子の影を掲げて左伝を講じ、以後孔子の生日と同じ庚子の日の来るごとに三伝・三礼・詩・書・周易・論語・孝経を順次講ぜしめたのは、多分大学寮における釈奠後の講書や、すでに百年來中絶している内論義に擬して私におこなったものであらうが、とにかく明経家の勉強をうながし、ひいて釈奠の講論にも活気を添える効はあったであらう。しかしこれらよりも一層めざましいのは釈奠晴儀の復興であった。釈奠はいつのころからか雨儀が常例となり、すでに遠く一条天皇寛弘二年二月、^(一〇〇五) 右衛門督藤原齊信が上卿として晴儀をおこなおうとしたときも諸司のこれを知る者が無く、結局従来通りの雨儀で満足しなければならなかった。^(一五三) それから約百五十年後の仁平三年、左大臣頼長はみずから晴儀の次第を考案してこれを外記に下し、七月末以來関係官人らを大学寮に集めて再三習礼をおこなわせ、みずからこれに監臨するとともにまた直講清原頼業を使とし、釈奠当日に風雨の歎なきよう廟前に祈らしめた。さてそ

の当日たる八月十日丁卯はあいにくの雨で、時々はやむ程度であったが、予定の通り晴儀を決行し、太政大臣実行以下がこれに列した。その盛儀をうかがうべき別記が佚したのはすこぶる遺憾であるが、翌久寿元年八月六日の釈奠にも晴儀を用いたことは日記に明文がある。

(一五三)

右の仁平三年の五月ごろ、頼長は鳥羽法皇に奏して「近代儒士多ニ無才者、是依ニ父^三拳ニ優ニ其子^二、不^レ論ニ才不才ニ給ニ學問料^一故也」といい、もし所望の輩をして試を奉ぜしめることにすれば無才の子を挙げる者は無くなるであろうから、禁中でこれを試むべきであるが、主上がなお幼年のことゆえ院においてひそかに試みられるようにと申した。然るに法皇は「朕雖ニ久親^レ政、未^レ嘗好^レ學、豈知^レ詩得失^二乎^一」とて、むしろ頼長の家でこれを試みたがよろしかりうと仰せられた。日記のこの日の条は「儒等聞^レ之、大恐懼云々」と結んである。³⁷ そもそも學問料は平安時代初期以来文章生その他紀伝道の学生などに給与せられる費用で、父祖または同房諸儒の推挙により、あるいは自薦によってこれを給し、時に學問料試をおこない、申請者に詩賦を課して二人を選び、宣旨によってこれを給した。³⁸ 例えば応和二年六月、学生藤原公方以下三人を召し、弓場殿において詩題を給うたが、このとき文章生橘列相ら数人はかねて學問料を申請しながらついに参らなかつた。³⁹ また長久四年九月にも文章生三人・学生一人を弓場殿に召し、勅題の試を給うた。これは文章生らが秀才を申し、学生が學問料を請うたからであった。⁴⁰ しかしこれらの二回のほかは大いなる父の推挙によりその子を給料生とした。⁴¹ これは諸道の家学化がいちじるしく進展した当時において、まことにやむを得ないことであつたとはいえ、自家の學統を守るに汲々とするあまり、無才の子をもあえて推挙するに至つてはその弊もまたはなはだしいといわなければならない。従つて、復古主義的改革意欲に燃えた左大臣頼長がこの弊にあきたらず、學問料試の復活を企てたのもまた当然であるが、法皇がそれを頼長の私第においておこなわれしめられたのは、まさに百年來中絶したこの公事をにわかに院・内において復興することに多少の危懼あるいは反撥を感じられてのことであつたらう。さて試は五月二十一日におこなわれ、式部大輔永範・文章博士茂明が題を献じ、菅原登宣ら六人が試

を奉じたが、光綱ら五人は試ありと聞いてのち所労を申し立て、ついに参らなかつた。頼長はこれらの不参者五人の父兄に書を送って今後学問料の望みを絶つべき由を伝え、奉試者六人の詩については博士らのほか通憲の意見をも徴し、ついに菅原登宣・藤原光範の二人を及第と認めた。⁴² こういう百年ぶりの厳格さで、紀伝の儒らをますます大恐懼せしめたのも、久しく文章に圧倒された経学を、いかにもして復興しようとする頼長の熱心と相表裏することであつたと思われるのである。⁴³

註

- 1 類聚符宣抄第九、明経准得業生試、長徳元年八月十六日太政官符。
- 2 家伝下（藤原武智麿伝）。
- 3 令集解卷一、官位令条。類聚三代格卷四、加減諸司官員并廢置事。
- 4 令集解卷三、職員令、大学寮条。続日本紀卷十、天平三年三月二十七日条。
- 5 扶桑略記卷六、天平七年四月二十六日条。続日本紀卷三十二、宝龜六年十月二日条。本朝文粹卷二、三善清行意見十二箇条。
- 6 続日本紀卷三十二、宝龜三年四月二十日条。同三十五、宝龜九年二月十八日条。同三十六、天応元年十月四日条。同三十八、延暦四年七月十七日条。
- 7 日本紀略大同三年二月四日条。類聚三代格卷十五、職田位田公廨田事、大同三年三月二十一日太政官符。
- 8 類聚三代格卷五、定官員並官位事、弘仁十二年二月十七日太政官符。
- 9 日本紀略承和元年四月二十日条。類聚三代格卷四、加減諸司官位并廢置事、承和元年三月八日太政官符。
- 10 延喜式第十九、式部下、試貢人及雜色条。同第二十、大学寮、講論条。
- 11 新儀式第四、御詔書事。官職祕鈔下、諸道官条。
- 12 日本紀略延暦十九年十月十五日条。令集解卷十五、学令、經周易尚書条。

- 13 続日本後紀卷十五、承和十二年二月二十日条。日本紀略天長八年八月十日条。続日本後紀卷八、承和六年八月二十四日条。
- 14 三代実録卷七、貞觀五年正月二十日条。
- 15 菅家文章卷十、為善河永貞上清和天皇請解宣侍母表。三代実録卷二十七、貞觀十七年四月二十五日条。文德実録序。類聚国史卷百四十七、文部下、講国史条。明文抄卷一、帝道上。田氏家集下。職原鈔上、大学寮条。
- 16 日本紀略延喜十六年七月十三日条。
- 17 続日本後紀卷十二、承和九年十月十七日条。三代実録卷三十八、元慶四年八月三十日条。扶桑略紀卷二十、同年月日条。
- 18 三代実録卷十七、貞觀十二年二月十九日条。続日本後紀卷十七、承和十四年五月十一日および二十七日条。文德実録卷八、斉衡三年十一月三日条。
- 19 扶桑略紀第二十、元慶元年十一月三日条。三代実録卷三十二、同年月日条。公卿補任貞觀六年および同十六年条。
- 20 三代実録卷三十五、元慶三年二月二十五日条。扶桑略紀第二十、同年月日条。古今和歌集目錄、都良香条。三代実録卷二十八、貞觀十八年四月十一日条。同卷三十一、元慶元年四月朔条。
- 21 扶桑略紀第二十四、延長四年五月二十一日条。
- 22 江談抄卷四。なお十訓抄第十、可庶幾才能事によれば、良香自身が羅城門を過ぎて「氣霽風櫛新柳髮」と詠じたとき、楼上に声あって「氷消浪洗旧苔鬚」と附けた。後日良香が道真の前でこの詩句を自讃したところ、道真は下句は鬼の詞であると評したという。これは道真が天満天神とあがめられるに至った天慶、天曆年間までに本来の説話が一段と成長したことを示すものであろう。
- 23 本節註1に同じ。
- 24 本論文第二節のはじめをみよ。なお桃裕行「上代学制の研究」二九二―二九八頁参照。
- 25 江吏部集卷中、帝徳部。
- 26 本節註1に同じ。

27 桃前掲書七八頁。年中行事秘抄、八月上丁釈奠事条。公事根源、二月釈奠条。

28 拙稿「中世における周易の研究について―南朝宋学説批判」(神戸女学院大学論集五ノ一、昭和三十三年)五頁参照。

29 愚管抄第四、崇徳天皇条。なお以下頼長の人物・性行については拙稿「藤原頼長」(歴史教育七ノ六、昭和三十四年)に詳説した。

30 台記卷一、康治二年十月三十日条。以下頼長の事蹟につき台記のみに拠ったところは多く註記を省略する。

31 台記卷二、康治元年正月二十八日条。

32 台記卷五、天養二年四月二十三日条。

33 頼長が師恩に報ずるに篤かったことについてはなお二三の事実をあげることができる。天養元年十一月、かれは伶人を召して楽を挙げさせたが、旧師藤原敦光が先日死去したと聞いてただちに伶人を退出せしめた(台記卷四)。これよりさき保延五年十二月の御遊に笙を吹けと仰せ付けられたときも、旧師源師頼の死後までもないころであったので手に所労ありと称して辞退した(古今著聞集卷八)。のち仁平元年二月、師頼の遺子師光のために昇殿をゆるされんことを奏請し、鳥羽法皇の聴許を得た(宇槐記抄卷中)。

34 本朝世紀第三十四、久安四年閏六月十八日条に通憲が文章博士らとともに土御門内裏造宮につき勤申したことを記し、「抑通憲非儒士、又非公卿、今関朝議、依稽古之力歟」と特筆している。本朝世紀が通憲の撰に成るに相違なくば、これもまた通憲の自信の程を示すことばであろう。

35 この天養二年六月以後の台記には通憲との交渉のいちじるしいものを見ない。ただ久安三年八月十五日条に頼長が鳥羽法皇の御堂におもむく途中通憲に会い、「周公撰政以成王幼乎」と問い、「非此故、為治周室故也」という答を得て、「所対合吾案、深知經義之人也」と感服したことを記している。両者の学識と自信のほどが知られて興味ある記事である。

36 権記寛弘二年二月九日条には「右衛門督為日上……用晴儀了」とあるが、小右記同日条には「今日右金吾着釈奠、可行晴儀、事多齟齬結者」、同十日条には善信朝臣の言として「不用晴儀、用雨儀」と見之、中右記寛治八年八月八日条には「凡近代釈奠之

儀、皆是雨儀也、一条院御時、故藤民部卿（齊信）為上卿日、欲行晴儀、然而諸司無知此事者、不相叶也、其後弥以絶了者」とある。思うに齊信は晴儀をおこなうことを企てたものの、実際にはやはり雨儀を用いるほかはなかったのであろう。

37 宇槐記抄下、仁平三年五月八日条。

38 桃前掲書二七四頁以下。

39 日本紀略応和二年六月十七日条。

40 扶桑略記第二十八、長久四年九月九日条。百鍊抄第四、長久四年九月九日条。今鏡卷一、すべらぎの上、ほしあひの条。

41 例えば康保二年には菅原文時、長保四年五月には大江匡衡が、いずれもその子に學問科を給わらんことを奏請した。本朝文粹卷六、奏狀中をみよ。

42 宇槐記抄下、仁平三年五月八日、二十一日および以後の条。古今著聞集卷四、文學。

43 台記卷四、天養元年六月二十三日条に、中原師安がある勘文に康治元年を永治二年と書いたので、頼長がその故を問うたところ、師安が言下に、「春秋之義、可書康治元年、而依本朝之例、書永治二年」と答えたので、頼長は「此事見定公九年、臨老忽發此言、儒哉々々」と歎美し、これを聞いた左大弁藤原顯業も「為明經博士、宜矣」といったとある。明經の儒に対する頼長の寛厚さは紀伝の儒に対する厳格さとは大いに趣きを異にしている。

四

康富記享徳三年二月十八日条によれば、中原康富が清原業忠に謁し、清原氏の家学に關して種々の談話を聞いた中に、「又中庸註事、以三本經為三家説、不被執新註之由事、仁安比有三大外記殿奥書、件年当淳熙己酉也、朱熹新註未渡時節也、自然相叶道理、奇特之至也」ということがあった。右の大外記殿すなわち頼業は業忠から数えて十二代の祖に当り、天養二年ごろから頼長の講筵に列し、やがて頼長の長男兼長の師として孝經を授けた。久安

二一四
二年四月、頼長は頼業が病むと聞き、修理大夫敦任をしてこれを見舞わしめた。敦任は疫疾の者を問うのは俗人の忌むところであると諫めたが、頼長は「頼業有^レ才無^レ所^レ忌、不可^レ過^二今日^一」¹と喋りてきかなかった。保元の乱後、頼業は左大臣経宗の知遇を受け、また右大臣兼実の信任を得た。ことに兼実は「頼業於^二明経道^一、不^レ耻^二上古^一之名士也²」と認めてその両息、良通・良経の師たらしめ、平氏滅亡後、内覧を命ぜられたころには頼業を家司に補し、大いに献替せしめることがあった。明経家清原氏の隆運はこの頼業以来のことであり、それだけに清原家のかれを崇敬することあつく、かの業忠が康富に語ったところもその中庸注目の先見の明をながく顕彰しようとしたものであろう。しかも業忠の孫宣賢筆の「大学聴塵」に至っては、

淳熙ハ宋ノ孝宗ノ年号也、已酉ハ淳熙十六年也、日本後鳥羽院文治五年ニ相当スル、(中略)朱子ハ日本高倉・安徳・後鳥羽ノ比ノ者也、後宝寿院ハ予ガ祖父也、コ、ヲ御講説ノ時御落涙アリ、常忠^(業忠)十二代ノ祖頼業^(頼業)礼記ノ中カラ此書ヲ抽出シテ是ハ後ニ重宝ト成ラント云リ、後ニ此書別ニ一卷シテ唐ヨリ日本ニ渡ル、意気相応、如^レ合ニ符節³、奇妙々々、此序ヲカケル時、頼業御死去ナリ、

とあり、大学表出の功をも頼業に帰している。これらのことの実否については、かの「高倉院の御侍説に清原頼業をめされけれども殿上はゆるされず、砌に立って授け奉れり、然るに其時頼業寵を得て礼記の中より大学中庸を抽出し教奉るといふは近きころの造言なり、一己の私を以て世を欺くは禁止すべし」⁴と仰せられた後光明天皇の聖断こそ千古の明鏡とすべきであらう。しかしこの学庸の抽出そのことが、日本宋学史の端緒をさぐる上に最も重要な手がかりであるからには、頼業に先立つこと二十余年の康治二年九月、礼記二十巻を讀了し、そのうち「是檀弓上下・学記・中庸、重可^レ見也、為^二殊勝之卷^一故也」⁵と気づいた頼長が果たして頼業以上に先覚者たる栄をになうべきか否か、改めて検討しておくことが必要であらう。

かの藤原佐世の日本国見在書目録に収められた書籍、四十家総計一万六千余巻のうち、易・尚書・詩・礼・楽・春

秋・孝經・論語八家の合計は二千四百八十卷に上っている。平安時代初期以来、中国商人の来航する者が毎々多くの書籍をもたらし、わが貴族の好尚に投じたことはいちじるしい事実であるが、ことに精巧優美な宋槧本ができてからは、中国商人はこれをわが権門に提供してますますその歡心を買ひ、その代償として貿易上の一層の便宜を与えられることを期待するようになった。例えば寛弘三年十月、左大臣道長は宋版五臣注文選文集などを贈られ、治承三年二月、入道前太政大臣平清盛は宋朝の禁書である太平御覽三百卷を宋商から入手し、これを内裏に献じた。これよりさき康治二年十一月、内大臣頼長が皇太后大進から礼記正義の摺本を借り、これを自分の所蔵する書写本の礼記正義と交換しようとし、また清原信俊から同じく摺本の周易正義を借り、能書家に委嘱してこれを美紙に写させ、この写本とかの摺本との交換を信俊に請ひ、もしその承諾を得がなければ、信俊がかねて望んでいる全經の本文五十卷をも書写させ、これをも添えてふたたび交渉する所存であったところ、幸いに信俊が最初の条件で交換に応じたので狂喜し、「余心悦、甚於三千金」と日記に書いた。頼長がこういう無理をしなければならなかったのは、かれもまた大いに宋槧本を愛好したにもかかわらず、当時のかれの政治的地位や実権が未だこういう貴重書の献呈を受けるにふさわしくなく、さりとてみずからこれを購入する資力も十分でなかったからであらう。然るに八年後の仁元年九月、すでに左大臣にして内覽の宣旨を賜ったときには、去年東坡先生指掌図二帖・五代史記十帖・唐書九帖を贈ってくれた宋の商客劉文冲に砂金三十兩を与えてこれに報いるとともに周易疏・尚書疏・釈註毛詩・礼記本疏問答・註春秋序・左伝疏・穀梁正義・孝經疏・論語正義などをふくむ二百二十余部を載せた要書目録を文冲に示し、今後もしこれらの書を得たときは必ず進送するように依頼している。頼長が果たしてこの註文の幾分を手に入れたかは詳らかでないが、かのいわゆる通憲入道蔵書目録にも經書三十部以上のほか唐宋北宋時代に成った諸書も少なからず散見するから、宋商の往来による宋本の輸入は依然相当に活発であったと思われる。

さて頼長が礼記を読み、中庸ほか数巻を「殊勝之巻」と認めた康治二年は南宋の朱子が学庸章句を撰定した淳熙十

二八六
六年より

四十六年も前である。しかし中国において中庸が礼記から抽出されたのは遠く南北朝の昔であり、唐・北宋の間にも中庸は大学とともに尊重され、独立の註釈書もできたのであるから、それらの註釈書が前記の諸書の場合と同様、宋商の手を経てわが貴族の架蔵に入ったことはあなかりに否定すべきではないであろう。頼長の勉強が經史雜家にわたったことはその日記や所學目錄の示す通りであるが、かれがまた經學においても五經正義のみにとらわれず、ひろく諸家の注疏や評釈を参照しようとしていたことはかの劉文沖に与えた要書目錄によって明らかにすることができるのである。ことに頼長が少年時代から愛好した春秋類においては注疏よりも左氏膏肓・穀梁廢疾・春秋繁露などの評釈書が多数を占め、北宋の孫明復の尊王發微まであげていることは、頼長經學に対する理解と熱心とを物語るものであらう。しかしここに見のがしてならないことは、右の要書目錄において礼類が比較的にさびしく、特に大學・中庸に関する注疏・評釈が皆無であることである。このことは頼長がせつかく八年前に中庸の特殊性に心づきながら、ついにその經學史上における意義と価値とを追究しなかったことを暗示するものであり、事実その後の日記に徴しても、かれが中庸の本義について哲學的考察を進めた様子はまったく見受けられない。従って単に中庸を「殊勝之卷」に数えたことのみを以て頼長を日本宋學史上の先覺者と認むべきでないことはいうまでもない。かれが康治二年七月以来、庚子の日ごとに自第において開いた講筵をみて、翌年十二月には前少納言源俊通をしてその講式を作らせたほどであり、その後左大臣時代に入るにつれて形式的論議を儀礼的にくり返す趣きがいちじるしく、もとより訓詁の學から性理の學への發展を追うような傾向は看取すべくもないのである。

頼長ほどの好學を以てしても、ついにこういう停滯におちいらなければならなかったところに、われわれは日宋文化交渉の限界を認むべきであらう。頼長をこういう停滯から脱却させ、窮理尽性の境地に到達すべき宋學發展の大勢にひき入れるには、それこそ宋土の學者の來朝でも待たなければならなかった。わが朝の明經道は多年沈衰の余、博士といっても學令所定の經業をわずかに墨守し、もっぱら記誦に終始するばかりで、ひろく諸家の注疏を比較検討す

る暇も力も無く、とうてい頼長の師たるに堪えなかった。例えば天養二年九月(一四五)に出家した清原信俊の如きも、「雖レ覺ニ本經一、平生不レ学ニ末文一、因レ之不レ通ニ義理二」という明経博士であつた。¹⁴また頼長の師父藤原成佐にしても、元來文章得業生出身であり、頼長の五經正義講説に侍し、訓詁の指導については十分に責めを果たしたとしても、これまた義理に通ずべくもない人であつた。さらに頼長に對し思想的に最も影響を与えた藤原通憲は有名なわりにその學問的系統の詳らかでない人であるが、頼長の日記に録されたかれの言行や、かれの撰修した本朝世紀の内容などによつてうかがえば、通憲はわが朝の故事にくわしく、その点では国史不勉強の頼長を慚愧せしめたものの、¹⁵經学においては頼長以上に深入りせず、むしろ易筮・天文占のような方術を得意として貴族社会の實際的需要に應じ、また機会あるごとにその博識を披露してますます貴顯の評判を勝ち得たのであつた。¹⁷通憲が青年貴族頼長に過褒の詞を呈したのも、こういう利巧な世渡りの一端であつたのであるが、同じく博識を誇る頼長がそれと氣づかなかつたところに、かれの後年の悲劇的運命の端緒が見え、またかれが代表する上代貴族の學問の効用のほどがうかがわれるのである。

天養元年八月二十一日、庚子の日、頼長は例によつて尚書の講筵を設け、講問終つてのちさらに成佐を探題とし、問者四人を率いて着座せしめ、前少納言源俊通を堅者として春秋の大意、三伝の優劣につき堅義せしめた。これは天台の論議の作法を儒道に適用したもので、頼長も日記に、「儒道堅義、今度始有ニ此事一、道之大事、何事如レ之乎」と書いている通り、これは何事も先例に依つて終始したこの時代に珍しい新しい試みであるから頼長も大事を取り、問答の内容については前月から堅者に知らせ、当日の問者四人の中には頼長自身も加わつたばかりでなく、明年のために探題は藤原友業、堅者は孝能と定めた。そして翌年の式日には友業不参のため頼長みずから探題となり、礼記正義の月令につき堅義をおこなつた。また翌久安二年八月二十一日には成佐が探題、清原頼業が堅者となり、左伝・穀梁伝中の義につき問答した。この天台論議の作法は頼長がよほど氣に入つてこれを他の場合にも応用したと見え一昨

年九月二十三日庚子の日の周易例講のとき頼長は講師として周易を以て如來の三身にあてており、また今年八月三日庚子の日に来て周易に関する問答を聴いた学晴僧都も「不_レ異_三于僧作法_二」ともらしたという。¹⁸（前記の庚子講式がそ

もそも僧の作法に従ったものである）。右の儒道堅義なる新形式は、あるいは頼長が中国における儒仏融合の形

勢を聞いて思いついたことでもあろうが、これはいうまでもなく主として形式上の折衷、混淆であり、周易を如來の三身に当てる程度の頼長の仏教観を以て儒仏二教の教義上の融合が進められたとは、とうてい考えられないところであらう。頼長が仁平三年^{（一一五三）}以来因明に関心を寄せ、みずから熱心にこれを習い、翌久寿元年九月^{（一一五四）}、因明八講をおこなうに至ったその詳細についてはここに述べる暇を得ないが、こういう因明研究もまた論理そのものよりもむしろ論議の

作法の体系的裏づけに興味をおぼえたことを動機とするものであり、すなわち儒道堅義と同様、儒仏二教の教義上の融合に資すべきものではなかったのである。なお頼長の第宅において庚申の日に老子の影を懸け、老子経を講じ、儒道にならって論議をおこない、夜半後主客ともに正南に向い、再拜後呪文を三度唱え、鶏鳴ののち就寝することも天養二年正月以来恒例となったが、^{（一一四五）}これまた庚子の日^{（一一四五）}の例講のように儀式要素が重きをなしたものであり、別して中国の儒道二教融合の形勢を反映したものとも思われないのである。

平安時代の中期以後、明経ますます衰えて紀伝ひとり栄え、文章の道は専門化し職業化し、朝臣の多くが文章博士らの奉仕に依頼してみずから作文せず読書せず、時に驚くべき無智無学を暴露し、紀伝家はまた貴顕の恩顧を争い求めて学者に似合わぬ官途の昇進を競い、学界あげて虚飾に満ち浮華に流れるとき、文章を顧みずして経史を専攻し、経学の復興によって道德を再建しようとした藤原頼長の見識と抱負とは、まことに時流に卓越したものであり、世人の耳目をそばたしめるものであった。かれは古來の明経家が記誦の学に終始したことにあきたらず、みずからまず五経正義を勉強し、ついで北宋諸儒の注疏詳釈の研究を志したのであるが、不幸にしてかれが呼吸した時代は、遣唐

使の停止以来中日間の国交が断絶し、唐宋文化の波及はわずかに中国商人のもたらす書籍文物によらなければならぬ時代であった。その書籍の輸入といっても、商人はもとより書籍を商品として取扱ったまでであって、別して書籍を通じて日本経学の新展開に貢献しようとする考えなどあらうはずもなく、またわが貴族にしても、これらの書籍をただ得るに従って珍重し愛好しただけであって、それらの古典に盛られた思想内容を体系的に把握し、その歴史的意義と価値とを理解するほどの自力もなく、就いて教を請うべき師家もいなかった。当時に珍しく古典を文献学的に歴史的に批判する才能と熱心とを有した「日本第一大学生」頼長にしても、日宋文化交渉にまつわる右の制約にわずらわされ、偶然手に入れた限りの書籍をひと通り読了した後は、ただ形式的な論議の続行に満足するほかはなく、まして漢唐訓詁の学に対する宋学の特徴などにはとうてい思い及ばず、周張二程子の名をさえ知らずに終ったのである。畢竟、宋学受容の内部的契機は未だ熟さなかった。中世の禪僧が禅法挙揚の方便として盛んに宋儒の口吻を借りるまで、大学も中庸も、ただ礼記中の「殊勝之卷」としてごく少数の識者の注目をひくにとどまったのである（完）。

註

1 台記卷七、久安三年十一月一日条。宇槐記抄上、久安二年四月十四日条。

2 古今著聞集卷十八、飲食条。

3 玉葉卷十、承安二年九月十七日条によれば、南宋明州の刺史から物を後白河法皇に献じ清盛にも贈ったが、その注文に「賜日本国王」とあるため物議をかもした。同二十二日、頼業が兼実（兼実）に召されて神宮解状につき先例を勘えしめられたとき、かれは後一条天皇朝以後の宋の牒状にかんがみ、今度の状は奇怪ゆえ返し遣わさるべきであると申した。これは頼業の自発的発言である。

この発言が頼業に対する兼実の信任を一層あつくしたと想定するのはよい。しかし頼業が朝議により宋の牒状につき先例を勘申したという説（富山房「国史辞典」卷三、清原頼業条）は右の神宮解状につき先例を勘えしめられたこととの混同に由来するあやまりであらう。

4 玉葉卷三十九、寿永二年十一月十四日条。

5 承応遺事。

6 台記卷三、康治二年九月十日および十二日条。

7 この目録の現存最古の写本は東京国立博物館蔵の鎌倉時代初期とおぼしきものであるが、佐世の撰進した原本そのままなく抄略本である。和田英松「日本国見在書目録に就いて」(史学雑誌四一の九、昭和五年)参照。

8 森克己「日唐・日宋交通に於ける史書の輸入」(富山房「本邦史学史論叢」上巻所収、昭和十四年)

9 御堂関白記寛弘三年十月二十日条。山槐記治承三年二月十三日条。

10 台記卷三、康治二年十一月三日および二十四日条。

11 宇槐記抄卷中、仁平元年九月二十四日条。

12 この目録には通憲歿後の書とみられる直物抄まで掲げられているので、通憲その人の蔵書目録とは認めがたいということとはもはや定説であろう。吉村茂樹「通憲入道蔵書目録についての疑問」(史学雑誌三九の一〇、昭和三年)参照。

13 新潮社「日本文学大辞典」(昭和二十九年増訂版)巻五の六八頁、中庸条。岡田正之「日本漢文学史」(共立社書店、昭和四年)三八四頁以下。宋史卷二百二、芸文一、礼類条。

14 台記卷五、天養二年九月二十四日条。

15 台記卷三、康治二年正月一日条。

16 宇槐記抄卷上、久安四年九月二十五日条。

17 第三節註35、第二節註6など参照。なお続古事談第二、臣節条によれば通憲は唐音に通じ、鳥羽院の御供としてある所にもむいたとき通事もなく唐人に接し、院の御下問あずかつて、もし唐へ御使に遣さることもぞ待るとて、かの国のことを習ったのであるとお答えした。ただしこれについては続古事談の撰者も、「遣唐大使ノ用意イトコチタシ、コノ比ノ人ハ当時イル事タダニナラハヌモノヲ」と評している。

18 以上すべて台記その日の条参照。

19 台記卷十、仁平三年七月十四日条。同卷十一、仁平四年（久寿元年）九月二十一日条。同十二月十七日条など。

20 台記卷五、天養二年正月十四日条。
(昭和三十四年九月二十三日稿)

Wajima, Yoshio

The Aristocratic Learning Career in Ancient Japan.

An Inquiry about the Origin of Japanese Interest in Chu Hsi's Theory, or Neo-Confucianism

(Continued)

Fujiwara Yoronaga (1120-56), so-called the greatest scholar in Japan, made his effort to revive the studies of Confucian scriptures in the orthodox manner, while most men of letters were still infatuated with Chinese literature. He gave a good example to them, reading through the "Five Classics" according to the commentary issued in China under the Tang dynasty.

The further progress, however, was not easy for him, because of the lack of new texts which would lead him to a study in Chinese contemporary philosophy. Sometimes, a good many books were imported into Japan by the hands of Chinese merchants, but at their own choice. Therefore, Yoronaga, as well as the other court lords, could not choose freely any text that was useful for his inquiry into the causes of Neo-Confucianism. So Japanese interest in Chu Hsi's theory could not be aroused before it was introduced by the Zen priests in the twelfth century.